

研究室を訪ねて

研究室を訪ねて



中村 陽一(なかむらよういち)
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授(法学部教授兼任)。1980年一橋大学社会学部社会学科卒業。同年、株式会社新評論入社。日本生活協同組合連合会を経て、89年に消費社会研究センターを設立。その後、都留文科大学文学部社会学科(助教授、教授)、東京大学社会情報研究所(客員助教授)などを経て、2002年4月、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科に着任。22年3月、本学定年退職

21世紀社会デザイン研究科 中村陽一先生

大学院の独立研究科である21世紀社会デザイン研究科の中村陽一教授は、2022年3月で定年退職されます。立教では約20年にわたって教壇に立ち、NPO団体などと連携して社会デザイン学に取り組んでこられました。

●何を学ぶのかもわからず 社会学の世界へ

一橋大学の社会学部に入ったんですが、あまのじゃくな性格で法、経、商、文など文系で主流といわれる学問に興味がなく「何となく面白そう」と、よくわからずに社会学部を選んだんです。でも実は映画制作の世界に魅力を感じていて、入学してもあまり授業に出ず、映画の現場に入り込んでいました。結局思うように撮れず、3年生から大学に戻るとなりました。

背景を持った方でした。アメリカの当時最新だった1950年代以降の社会学を体系的に導入した南博先生と戦後日本の社会学の碩学の一人である高島善哉先生という、異なる系譜の2人を師に持つ先生だったんです。このことが社会デザインという非常に間口の広い学問につながっているのかな、と思います。社会心理学やマスメディア的な話と、社会思想や哲学思想的なものが混じり合い、佐藤先生を経由して私に流れ込んだ感じですね。

●社会人生活の中で「市民活動」に出会う

卒業後は大学院進学も考えたんですが、自分のやりたいことはもう少し社会に即したことで、という思いから出版社に就職しました。小さな会社で、当時は月に1度休めるかどうかの、今流に言えば超ブラックな会社でした。でも本作りに関して、編集から印刷、製本、営業にいたるまで全部自分で担当させてもらえたので、忙しくてとても面白かったです。

に入り出版部門で月刊誌のデスクを担当しました。月のうち半分は取材に出っていましたね。その際に、地域でいわゆる市民活動とか後のNPOにつながるような、環境や福祉、まちづくりや教育、国際交流など、生協の活動に限らずいろいろな分野を取材したんですね。そのとき「生活の場から大きな変動が起こっているな」と肌で実感したんです。それまでの市民運動は行政に対して抗議し、あとの対応はお任せというのが一般的でした。80年代半ば以降は行政に任せきりじゃなく、どう変えていか自分たちから提言をしないとか何とかわらないぞ」という新しい発想が芽生えてきたんです。これはまさに今やっている社会デザイン学に直結している、それを直接現場で見られたのは幸運でした。

●アメリカでNPOの現場にふれ、感銘を受ける

その後89年に消費社会研究センターを設立しました。当時は「非営利独立ネットワーク型シンクタンク」なんてカッコつけて呼んでいたんですが、今でい



「21世紀社会デザイン研究科はOB・OGのつながりが強く、交流も活発です」と中村陽一先生

に約3週間、アメリカ各地にある様々なタイプのNPOやそれを支援する企業、財団などを視察する機会に恵まれました。特に印象的だったのが、市民に企業や財団のお金を循環させる、いわゆる市民ファンドのマネジャーの話で「表面的な運動だけでなく、金銭的にも共感を得る運動をしなければいけない。良きお金の循環がないと良き世の中は作れない」と。実はその人かつてはホワイトハウスで政府系の仕事をしてたと言ってます。アメリカは大統領が変わる度にスタッフも変わるの、政府のスタッフが民間に行くこともあれば逆もある。そうやって人が循環することで、政策形成力のある人材が育つんだな、と感心し、日本にもいずれこういう仕組みを作りたいと思っていました。日本では95年の阪神

う社会起業家的な発想です。政府や行政、民間企業、NPOや市民活動など協働、工夫して社会的なプロジェクトをやっている、と。そこで聞いたのが欧米には市民運動のスタッフにちゃんと給料を支払う組織があった、事業として成り立たせる場があるんだよということ。日本的な発想では市民運動は食えないって意識がありました。NPOについて英語文献などを調べるうちに、違う組織原理のものがあるんだ、と分かってきました。



2002年、立教着任当時の中村先生。新しい取り組みを担う12人のうちのひとりとして、ANAの機内誌で取り上げられました

淡路大震災をきっかけにNPOやボランティア活動が一般に認知されはじめ、98年にはいわゆるNPO法もでき、以降徐々に定着してきました。

●社会デザイン学は 世界をいい方向に変える

96年からは専任教員として都留文科大学で教壇に立ち、東京大学で客員助教授なども務めました。そして2002年に21世紀社会デザイン研究科が設立された際に、立教大学へ呼んでいただきました。

社会デザイン学では社会を良くすると同時に、変えていくことが目標です。そのためには理論的、構造的な視点が必要で、それプラス現場を見据える視点が掲げてきた人材像に「ソーシャルデザイン」というのがありますが、これは職業ではなく職能なんです。公務員や会社員、NPO職員や議員など、いろいろな場所にソーシャルデザイナーが増え、お互いをゆるやかに繋いでいけば、身近なところから社会を変えるのに少しずつ近づくと、思っています。

文/野岸幸之 撮影/増元幸司

3月で定年退職される先生方

加藤 睦 文学部教授
1983年3月東京大学人文科学研究科修了。92年4月文学部日本文学科助教授として本学着任。入学センター長/広報渉外部長/総長補佐/文学部長/常務理事/副総長/リサーチセンター長/RSSC副学長/体育会長等を歴任。専門は平安・鎌倉時代の和歌。

須永 徳武 経済学部教授
1989年3月日本大学経済学研究科修了。98年4月経済学部経済学助教授として本学着任。入学センター長、経済学部長などを歴任。専門は近現代の日本経営史。資本輸出の観点から日本企業の植民地進出を中心に研究。

松山 伸一 理学部教授
1985年12月名古屋大学農学研究科修了。2003年4月理学部生命理学科教授として本学着任。専門分野は遺伝学と機能生物化学。膜タンパク質の解析を通して生体膜の生合成機構を明らかにする研究に取り組む。

萩原 なつ子 社会学部教授
1988年3月お茶の水女子大学家政学専攻家庭経営学専攻修了。2006年4月社会学部社会学科および21世紀社会デザイン研究科助教授として本学着任。20年4月から現在まで独立研究科運営部長。専門は環境社会学/NPO非営利活動論/ジェンダー研究等。

竹中 千春 法学部教授
1979年3月東京大学法学部卒業。2008年4月法学部政治学科および法学部政治学専攻博士課程教授として本学に着任。国際政治学・比較政治学・ジェンダー研究を足場に、南アジアの政治とその歴史を研究している。

中村 陽一 法学部教授
1980年3月一橋大学社会学部社会学科卒業。2002年4月21世紀社会デザイン研究科および法学部法学科教授として本学着任。10年4月～12年3月・16年4月～18年3月独立研究科運営部長。社会デザイン、NPO/NGO、まちづくり等を研究。

濱野 亮 法学部教授
1989年4月法学部助手として本学着任。講師、助教授を経て2003年より教授。10年より体育会ラグビー部長。総長室調査役、英語ディスカッション教育センター長を歴任。専門分野は法社会学。

万田 邦敏 現代心理学部教授
2006年4月現代心理学部映像身体学助教授として本学に着任。物語映画の製作を研究テーマとしている。映画監督・脚本家としても活躍し、カンヌ国際映画祭や高崎映画祭など国内外の映画コンクールでの受賞歴をもつ。

マーク・カプリオ 異文化コミュニケーション学部教授
1996年4月に助教授として本学に着任。2008年3月まで法学部教授。同年4月から現在まで異文化コミュニケーション学部教授をつとめる。専門は朝鮮現代史、日朝関係史である。